

“現代の女坑夫”であるために

熊谷 博子

7年がかりで完成した映画『作兵衛さんと日本を掘る』が、今、全国で公開中だ。残した絵が、日本初の世界記憶遺産に登録された筑豊炭田の炭坑夫、山本作兵衛と、105歳まで生きた元女坑夫の物語である。

作兵衛さんが描いたのは、熱く暗い地の底で、上半身は裸で石炭を掘り出し運ぶ、男と女。この国と私たちの生活を支えてきた人々の姿だ。最も過酷な労働なのに、女坑夫たちはドキドキするほど艶っぽい。昭和初期までの炭鉱の労働だが、私には現代に思えた。炭鉱も原発も同じエネルギー産業であり、その構造はまったく変わらない。この間、ロングランを続ける東京の劇場で、静かに涙を流すたくさんの人に会った。

女性の坑内労働は、1933（昭和8）年に法律で禁止されたが、筑豊では戦後もひそかに続いた。他に働き場所がなかったからだ。元女坑夫、橋上カヤノさんの言葉が胸をうつ。「貧乏が鍛えてくれた」と穏やかな笑顔で言う。夫とともに坑内で働き、その夫は、戦場から腕を失って戻ってきた。7人の子どもを産み、戦後、貧しさの中で6人の子どもを次々失った。1週間に2人亡くしたこともあった。夫と最後に残った子どもにも先立たれ一人で懸命に生きてきた。当時坑内で石炭を運んでいたかごを探して持っていくと、懐かしい、と背負ってみせる。自分のしていた労働への誇りがあった。私は、カヤノばあちゃんが長生きして体験を残してくれたことに心から感謝した。

筑豊に住み続けた、詩人で作家の森崎和江さんが最初に書いた本は、『まっくら一女坑夫からの聞き書き』だ。炭鉱によって、日本をどう見るのかがよくわかった、と映画内で語る。

上映を続ける中で、つくづく思った。私は“現代の女坑夫”でありたい。私たちの足元には、埋もれている事実がまだたくさんある。それを掘り出し、表に運び、皆で一緒に未来に向かう坑道を作りたい。



PROFILE

くまがいひろこ：映像ジャーナリスト。TV番組制作会社で、戦争・原爆・麻薬などの社会問題を追い85年に独立。自らの育児体験をもとにした『ふれあうまち』（95年）などを監督。三池炭鉱の歴史を描いた『三池～終わらない炭鉱の物語』（05年）で、日本ジャーナリスト会議・特別賞、日本映画復興奨励賞など。NHK・ETV特集「三池を抱きしめる女たち～戦後最大の炭鉱事故から50年」（13年）で、放送文化基金賞・最優秀賞など。